國學院大學学術情報リポジトリ

On Arguments of the Transitive Predicate Su : Covering Native Japanese Arguments in the Native Japanese Prose in the First Half of the Tenth Century only

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-02-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中村, 幸弘 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000940

他動詞「す」の賓語について
―十世紀前半成立の和文の和語の賓語に限って―

中村　幸弘

キーワード：他動詞「す」の賓語、連用形名詞・非連用形名詞の賓語、連体形修飾語を冠した賓語、指示語による賓語、深層に想定される賓語

一　他動詞「す」の賓語を整理する必要性
―併せて、その資料の成立年代を限って調査する理由―

動詞「す」について、山田孝雄は形式用言と呼んで取り扱っているが[1]、そのとおりで、「漠然と動作作用をあらは」し、「実質的属性観念を捨象し」た動詞である。そこにいう「観念」は、現代語としては、〈概念〉に相当しようか。その概念がないといってよい動詞「す」は、その概念を表す語や語句を必要とすることになるが、山田は、その語や語句を「賓語」と呼んでいる。その術語「賓語」は同書索引からは、同書に六十七か所登場することになるのである。

その賓語について、「この用言の賓語たるものは体言及体言の資格を得たる用言及び副詞の一部なり。」として、以下にその各種用例を挙げているが、現在一般には一語の複合動詞として取り扱われているものも、また、漢語・カタカナ外来語の賓語も、さらには、自動詞・他動詞の別を設けることなく形式用言「す」として併せ列挙していることなどから、動詞「す」の賓語の理解は、決して容易ではないようである。もちろん、それは、偏えに、筆者の魯鈍のしからしめるところではあろうが、無概念といってよい動

詞「す」に、それぞれの賓語が、どのような手順をもってその概念を付与させていくのか、その表現の読解の要領と結びつけて整理してみたい、という思いともなっていた。

さて、動詞「す」は、他動詞としてだけでなく、自動詞としての機能も広く認識されている。現行の古語辞典の多くが、自動詞「す」のブランチ①に、「音」「声」などがガ格によって、その自動詞「す」に先行する用例が引かれている。少し深く踏み込んだ辞典は、そこに、自動詞から成る連用形名詞「見劣り」などがガ格によって、その自動詞「す」に先行する用例も引いていよう。ブランチ②として、自動に機能する「…むとす」の「す」を引いているものもあろう。ブランチ③として、形容詞・形容動詞・断定の助動詞「なり」の連用形に付く「して」の「し」を引いているものもあろう。[2] ただ、そのブランチ②・③は最近時の傾向としては、立項が見送られている。さきごろ、筆者は、「連体修飾語を必須とする「さま」「心地（こころち）」「けはひ」などと、その述語となる自動詞「す」とについて」を発表させていただいた。[3] その、連体修飾語を冠した「さま」「心地（こころち）」「けはひ」は、ガ格によって、自動詞「す」に先行する。この一群を加えて、いま筆者が認識している自動詞「す」は、現行古語辞典のブランチ①に見る二群―「音」「声」などと、「見劣り」など自動詞の連用形名詞とが、ガ格によって先行する動詞「す」―との三群となった。それらを新ブランチ三項としてもよいと思っている。そして、そのガ格は、主語というより、対象語といったほうがよいもので、それらが、自動詞「す」の賓語に相当するものと見ている。

自動詞「す」は、ガ格の賓語を受けて、その概念が付与される、と一往思おうと思っている。その一方で、自動詞「す」は、すべて、〈感じられる〉意である、とも思っている。それに対して、他動詞「す」は、辞典類のブランチ立項も、六項ほどになるであろう。その他動詞「す」は、日本人である筆者にとっての国語についての認識として、ヲ格の賓語によってその概念が決定づけられる、と感じている。少しく、その国語としての日本語の古典語について認識を重ねてきた経験から、他動詞「す」は、すべてヲ格賓語を必要とする、と推断している。ただ、そのヲ格賓語だけでなく、ニ格賓語もト格賓語も、その他動詞「す」への概念付与に関わっていると感得している。そこで、他動詞

「す」については、ヲ格＋「す」の理解を徹底させ、ニ格＋「す」／ト格＋「す」の理解へと進め、ヲ格＋ニ格＋「す」／ヲ格＋ト格＋「す」へと展開させていく読解手順が配されなければならないと思っている。その限られた一部をシミュレーションしたものとして、これも、さきごろ、「『源氏物語』の動詞「す」読解」―ヲ格＋ニ格＋「す」構文への注目―を発表させていただいた。[4]

その一方で、律文の動詞「す」の傾向を感じとろうとして、「『万葉集』歌の動詞「す」について―十五の観察視点―において、まず、『万葉集』歌の動詞「す」の実態を整理してみた。[5] さらに、八代集和歌についても、その『万葉集』歌についての調査要領に倣って整理を続けていて、その後、「『古今和歌集』『後撰和歌集』『拾遺和歌集』『後拾遺和歌集』歌の動詞「す」について」／「『金葉和歌集』『詞花和歌集』『千載和歌集』『新古今和歌集』歌の動詞「す」について」という報告ともなっている。[6][7]『万葉集』歌に見た傾向と八代集歌の傾向とでは、一定の相違が認められたところから、当代の散文がどうであったか、平行させて観察しておこうという思いが湧いてきたのであった。それだけではなかった。「『源氏物語』の動詞「す」の読解―ヲ格＋ニ格＋「す」構文への注目―」の作業過程においても、中古和文の他動詞「す」のヲ格賓語の整理を先に終えておかなければならないと思っていたからである。そして仮名和文の初期のものとは、やはり一定の相違するところがあろうと感じとれてもいたからである。

『竹取物語』『伊勢物語』『大和物語』『土佐日記』からのカード採集は、新編日本古典文学全集本に拠ったからということでしかなく、作品ごとの傾向の見えるところもあったが、それは追ってのこととしたい。他動詞「す」の賓語についての観察なので、ヲ格賓語としたいと思っていたが、ヲ格賓語として読みとることになっても、表現としては、意外なほどに多様であって、以下に章立てする七章（第二章から第八章まで）のうち、表現として確かなヲ格賓語となっていたのは、第二章の用例だけであったこともあって、小稿の題目としては、ヲ格を避けることとした。ただ、それは、それほどに、ヲ格と読みとれる表現が多様だということなのである。そのヲ格については、表出・非表出があるところから、非表出用例については、〔ヲ〕というように

示すこととした。

『古今和歌集』『後撰和歌集』からは積極的に引用する用例が見られるわけではないが、『万葉集』の用例を新日本古典文学大系本に拠っていたこともあり、また、八代集和歌は、そこにしか揃っていないところから和歌すべて、その新日本古典文学大系本に拠ることとした。なお、その仮名遣いについては、現行の歴史的仮名遣いの原則に従って統一することとした。

二　連用形名詞がヲ格賓語となる他動詞「す」

古代語の律文『万葉集』歌では、この小見出しに該当する用例が、他動詞「す」の賓語の大半を占めていた。[8]

その連用形名詞も、非連用形の本来の名詞に動詞連用形が接続した複合名詞【第Ⅰ群】をヲ格賓語とするものが最も多く、二動詞連接の複合動詞が連用形名詞化した【第Ⅱ群】は、その七分の一弱だった。もちろん、一単語動詞が連用形名詞化した【第Ⅲ群】がヲ格賓語となっている用例もあって、以上が『万葉集』歌に見られた傾向であった。八代集和歌においても、他動詞「す」のヲ格賓語となる連用形名詞は以上三種類であったが、全体的に、異なり語数も延べ語数も減少、なかでも、二動詞連接の複合動詞が連用形名詞化したものは殆ど見られなくなり、残る二種類の用例群は、連体修飾語を冠した用例【第Ⅳ群】を見せるようになっていく。いま、観察しようとしている十世紀初頭前半の和散文を見ても、その連用形名詞をヲ格賓語とする他動詞「す」は、おおむね、それらと変わることない傾向にあった。

【第Ⅰ群】

○この里に旅寝（たびね）〔ヲ〕$\boxed{し}$ぬべし桜花ちりのまがひに家路（いへぢ）わすれて（古今・七二）

和歌の素材としてふさわしいのであろう、その旅寝「〔ヲ〕」を他動詞「す」のヲ格賓語とする用例は、他に、（古今・一二六）にも（後撰・一八七）にも見られた。

○心がへ〔ヲ〕$\boxed{する}$物にもが片恋（かたこひ）はくるしきものと人にしらせむ（古今・五四〇）

「心がへ」という、精神的行為をいう連用形名詞の登場に注目される。

○男、宮仕へ〔ヲ〕$\boxed{し}$にとて、別れ惜しみてゆきにけるま

まに、…。（伊勢・二十四）

○帝、おりゐたまひて、…ところどころ山ぶみ〔ヲ〕したまひて行ひたまひけり。（大和・二）

○日一日、風やまず、爪はじき〔ヲ〕して寝ぬ。（土佐・一月二十七日）

○…よきほどなる人になりぬれば、髪あげなど〔ヲ〕とかくして、髪あげさせ裳着す。（竹取・かぐや姫の成長）

右の「髪あげ」は〈成人式〉を意味していて、髪を上げることをいっているのではない。続く「髪あげさせ」から、明らかである。また、その連用形名詞「髪あげ」が副助詞「など」を伴っていること、さらに、その「し（→す）」が、指示語副詞「とかく」によって修飾されていることにも注目しておきたい。

【第Ⅱ群】

○秋ならでおく白露は寝覚め〔ヲ〕するわが手枕のしづくなりけり（古今・七五七）

○あだくらべかたみにしける男女の忍び歩き〔ヲ〕しけることなるべし。（伊勢・五十）

△（この在次の君は）心あるものにて、人の国のあはれに心ぼそきところどころにては、歌よみて、書きつけなどなむしける。（大和・百四十四）

右の「書きつけ」は、書きつける動作をいうだけの意で、複合動詞「書きつく」が副助詞「など」を添え係助詞「なむ」を共起させるために連用形となり、補助動詞「し（→す）」が、その活用機能を補うために用いられるものと解せる。(9)

【第Ⅲ群】

○思ひ出でておとづれ〔ヲ〕しける山びこの答へにこりぬ心なに也（後撰・八七六）

○かかれば、この人々、家に帰りて、物を思ひ、祈りをし願を立つ。（竹取・五人の貴人）

「物を思ひ」や「願を立つ」の影響もあろうが、とにかく、ヲ格賓語として格助詞「を」が表出されている。

○（惟喬の）親王、歌をかへすがへす誦したまひて、返し〔ヲ〕えしたまはず。（伊勢・八十二）

○（まがきするひだのたくみのたつき音のあなかしがましなぞや世の中）などいひて、「行ひ〔ヲ〕しに深き山に入りなむとす」といひていにけり。（大和・四十三）

右の「行ひ」は、〈修行〉の意である。また、「いと心憂き身なれば、死なむと思ふにも死なれず。かくだになりて、行ひをだにせむ。…」となむいひける。」（大和・百三）ともあって、そのように、格助詞「を」を表出していることもある。副助詞「だに」を用いたことや意志の表現であることなども関係していようか。

○…船君なる人、波を見て、国よりはじめて、海賊報い〔ヲ〕せむといふなることを思ふうへに、海のまた恐ろしければ、頭も白けぬ。（土佐・一月二十一日）

【第Ⅳ群】

○「…『うたてある主（＝大伴の大納言）の御許に仕うまつりて、すずろなる死にをすべかめるかな」と、揖取泣く。（竹取・大伴の大納言）

右の「すずろなる死に」の「死に」は、〈死に方〉を意味している。

○親王喜びたまうて、よるのおましの設け〔ヲ〕せさせたまふ。（伊勢・七十八）

右の語句「よるのおましの設け」の、連体修飾語「よるのおましの」を冠した被修飾語「設け」は、連体修飾語「よるの」を「おまし」の上に冠し、さらに連体格助詞「の」を添えて連体修飾語としていることになる。そのような連体修飾語「よるのおましの」を冠した連用形名詞「設け」が、動詞「せ（→す）」のヲ格賓語「よるのおましの設け」となっている用例である。

○見し人の松の千歳に見ましかば遠く悲しき別れ〔ヲ〕せましや（土佐・二月十六日・和歌）

右の語句「遠く悲しき別れ」の「遠く悲しき」は、並立関係にある「遠く」と「悲しき」とが結びついて、連用形名詞「別れ」の連体修飾語となっている。そのような連体修飾語を冠した「遠く悲しき別れ」が、動詞「せ（→す）」のヲ格賓語「遠く悲しき別れ〔ヲ〕」となっている用例である。

他動詞「す」のヲ格賓語となる連用形名詞については、以上のように整理することができる。【第Ⅰ群】用例が『万葉集』歌に多かったことは既に述べてきているところであるが、この十世紀初頭の和散文に見る連用形名詞「宮仕へ」「山ぶみ」「爪はじき」「髪あげ」などには、名詞としての概念が特化されて、術語性の認められるものが見られたこと

が注目される。[10]【第Ⅲ群】のうちの「返し」「行ひ」についても、そう受けとめられた。【第Ⅳ群】用例については、『万葉集』歌には、その用例を見ないこと、これも、あらかじめ述べておいたところである。この、他動詞「す」のヲ格賓語としての連体修飾語を冠した連用形名詞の登場については、さきごろ発表の機会を得た「連体修飾語を必須とする和歌の類句「恋もするかな」」において、その具体的な用例を紹介したばかりである。[11]構文史のうえから、注目してよい一つの展開が見られた、といってよいであろう。

三　非連用形名詞が賓語となっている他動詞「す」
―形式名詞は除いて、次章・第四章で取り扱う―

本来的にといったらよいであろうか、動詞から転成したものなどでなく、もともと無活用語で主語となりうる、そのような名詞をどう呼んで取り扱ったらよいか、悩んだ末に、右の小見出しとなった次第である。また、その小見出しに副題を添えたように、形式名詞「こと」「わざ」が連体修飾語を冠した用例については、次章・第四章で取り扱うこととした。そこには、一定の特徴が見えてきたからである。

以下に、その非連用形名詞を他動詞「す」の賓語とする用例について観察していくこととする。あらかじめ、その非連用形名詞についての語彙分類を試みはしたものの、以下、意味ある視点からの配列となりえたかどうかはわからない。

○あらたまのとしの三年を待ちわびてただ今宵こそ新枕（にひまくら）
〔ヲ?〕すれ（伊勢・二十四・和歌）

その「すれ」は、賓語「新枕」に関連する動作を担っていて、現代人の感覚からは〈用いる〉意を経て〈交わす〉意を読みとることになろうか。この一首の読解としては、〈新枕を交わす〉から〈情を交わす〉意を読みとることが期待されるであろう。非連用形名詞がヲ格賓語となっている他動詞「す」の代表的な一用例である。ただ、そのヲ格について、〔ヲ?〕としたのは、少々躊躇されるところもあったからである。『万葉集』東歌に、「足柄（あしがら）のままの小菅（こすげ）の草（くさ）枕（まくら）あぜかまかさむ。児（こ）ろせ。手枕（たまくら）〔ニ〕」（万葉・14・三三六九）とあったからである。その「せ」は命令形で、ニ

格の「手枕」が倒置法で詠まれていたからである。

○かくてすまずなりてのち、中将のもとより、衣をなむ[し]におこせたりける。（大和・百六十）

その「衣」を、どういう目的で送ってよこしたかについて、その動作を他動詞「す」で表現している。その「し（→す）」は、〈仕立てる―その「仕」は、他動詞「す」の連用形「し」で、複合動詞の前項となっている―〉と訳したりするところである。現代人は、ニ格を期待するかもしれないが、「…鬚籠をあまた[せ]させたまひて、…。」（大和・三）などからも、完成品名をヲ格にして他動詞「す」を用いて、〈作る〉意を表したもののようである。

○（多賀幾子と申す女御）うせたまひて、七七日のみわざ〔ヲ〕、安祥寺にて[し]けり。（伊勢・七十八）

「七七日のみわざ」は四十九日の法要で、その「し（→す）」は、〈営む〉などと訳出されるであろう。現代人は、神事も、行事を広くholdやopenの訳語「開催する」を用いるようだが、古典語では、行事を広く「す」で表現している。以下の二用例は、和語の連用形名詞が連体修飾語を冠した行事名をヲ格賓語とする用例で、「近江なる筑摩の祭〔ヲ〕とく[せ]なむ。つれなき人のなべのかず見む」（伊勢・百二十・和歌）も「…三条の大行幸〔ヲ〕[せ]し時、…」とのたまひて、…。」（伊勢・七十八）も、その「せ（→す）」は、〈催す〉とも〈行う〉とも訳せる用例である。次は、漢語を用いた行事名をヲ格賓語とする他動詞「す」の用例だが、「四十の賀〔ヲ〕、九条の宮にて[せ]られける日、…。」（伊勢・九十七）も、また、その一用例である。

○二十六日。なほ守の館にて饗宴〔ヲ〕[し]ののしりて、郎等までに物かづけたり。（土佐・十二月二十六日）

その「あるじ〔ヲ〕す」は、わが家到着の前日にも、その当日にも、繰り返される。「この人の家、喜べるやうにて、饗応〔ヲ〕[し]たり。」（土佐・二月十五日）と「かくて京へ行くに島坂にて、人、饗応〔ヲ〕[し]たり。」（土佐・二月十六日）とである。ところが、『伊勢物語』には、「むかし、左兵衛の督なりける在原の行平といふありけり。その人の家によき酒ありと聞きて、上にありける左中弁藤原の良近といふをなむまらうとざねにて、その日はあるじまうけ〔ヲ〕[し]たりける。」（伊勢・百一）ともあったのである。名詞「あるじ」に下二段活用動詞「まうく」の連用形が付

いた「あるじまうけ」は、前章・第二章で確認してきた連用形名詞の【第Ⅰ群】である。「あるじ〔ヲ〕す」は、その省略形と見てよいであろうか。同じ歌物語でも、『大和物語』には「日も高うなれば、この女の親、少将にあるじ〔ヲ〕すべき方のなかりければ…。」（大和・百七十三）とあって、「あるじ」に動作性を内包させて用いていたのであろうか。

○…この男は、ここかしこ人の国がちにのみ歩きければ、ふたり（＝もとの妻と今の妻）のみなむゐたりける。この筑紫の妻（＝今の妻）、しのびて男〔ヲ〕したりける。（大和・百四十一）

何ともストレートな表現である。その他動詞「す」を、新全集は、〈こしらえ（ていた）〉と訳出している。同じ『大和物語』に「（その若人＝若女房は、）いといたう人々懸想しけれど、思ひあがりて男など〔ヲ〕もせでなむありける。」（大和・百三）とあるが、その「男など〔ヲ〕も」の「など」は、どのような事柄を含めていおうとしているのであろうか。さらに、その『大和物語』には、「…「ゆめ、こと男〔ヲ〕したまはず。…」といひて、…。」（大和・百六十九）ともあって、夫以外の男性との関係であることと明確に表現している。百三段の「男など〔ヲ〕もせで」は、その若人が夫をもっているわけではないので、恋人との関係をいう「男〔ヲ〕す」もあることになろう。

非連用形名詞を賓語とする他動詞「す」も、大方が、その賓語をヲ格で受ける関係にあるものと見てよいであろうが、連用形名詞を賓語とする場合に比して、その賓語のなかに動作性が内包されていないからであろうか、その非連用形名詞の賓語と他動詞「す」とがすべて直ちにヲ格で結びつくともいいきれないようである。その結びつきに、若干の飛躍あるものが見られた、といったらよいであろうか。

四　形式名詞「こと」「わざ」によって括られた語句がヲ格賓語となっている他動詞「す」

形式名詞が用いられているということは、その連体修飾語に実質的概念があるということである。その連体修飾語のままでは、名詞を受けて格関係を示す格助詞を下接させたり、連続する他の文節との関係として格関係を構築したりすることができないからである。そのような形式名詞「こと」「わざ」によって括られた語句がヲ格賓語となって

いる他動詞「す」の用例が、それぞれ若干見られた。

○…思ひわびて、ねむごろにあひ語らひける友だちのもとに、「かうかう、ひまはとてまかるを、なにごともいささかなること〔ヲ〕もえせで、つかはすこと」と書きて、…。（伊勢・十六）

紀の有常の晩年、暮らしが苦しくなって、長年親しみあった妻も、尼となって出ていくことになった。そのことを懇ろに心を通わせていた友人に書いて送った書簡に見る用例で、〈わずかなこと（もしてやれなくて）〉という「いささかなること」である。相当する一単語の名詞などは、見当たらないようである。

○枕とて草ひきむすぶこと〔ヲ〕もせじ。秋の夜とだにたのまれなくに（伊勢・八十三・和歌）

水無瀬の離宮での鷹狩の後、惟喬の親王は、御酒を下されて、馬の頭だった翁を容易には帰してくださらなかった。そのような場での、その翁の歌である。そこでの旅の仮寝をいっているのだが、その、他動詞「せ（→す）」のヲ格賓語として、「枕とて草ひきむすぶこと」に代わる、この場にふさわしい表現は、ないといってよいであろう。

○「翁、年七十に余りぬ。今日とも明日とも知らず。この世の人は、男は女にあふことをす。女は男にあふことをす。その後なむ門広くなりはべる。…」。（竹取・五人の貴人）

右の「女にあふこと」「男にあふこと」の「あふ」は、〈結婚する〉意で、執拗なまでにそのような諄い表現をするのは、かぐや姫を早く結婚させようとするあまりのことであろうか。『大和物語』の、前章・第三章で見た、あの「男〔ヲ〕す」とは、ニュアンスの違いを認めなければならないであろう。

○中納言は、わらはげたるわざ〔ヲ〕して止むことを、人に聞かせじとしたまひけれど、それを病にて、いと弱くなりたまひにけり。（竹取・石上の中納言）

石上の中納言は、かぐや姫から課せられた燕の子安貝を取れという難題に応えようとして、燕の巣から何かを握り取りはしたが、家来たちが中納言の乗っている籠を早くおろそうとして綱を引っぱりすぎ、綱の遊びがなくなった瞬間、鼎の上に落ちてしまった。その握ったものは古糞で、腰も折れてしまった。右の引用は、それに続く部分

で、その「わらはげたるわざ」は、〈子どもっぽい行為〉ということで、中納言のやりそこないの行為を指していることになる。

実質名詞としては、漢字表記「業」「技」からも理解できるように、一定の評価できる行為をいうことになる。さらには、仏事をまで意味するが、一方では、非難の意の連体修飾語を受けて、単に行為をいうことにもなる。それが、形式名詞「わざ」である。

○むかし、男、みそかに語らふわざ〔ヲ〕せざりければ、いづくなりけむ、あやしさによめる。

吹く風にわが身をなさば玉すだれひま求めつつ入るべきものを

返し、

とりとめぬ風にはありとも玉すだれたが許さばかひま求むべき　（伊勢・六十四）

以上で一段となっている段である。ある男が、女のほうが自分とひそかに契りあう行為にも及んでいなかったので、その女がどこの人か、不審のあまり詠んだ、というのである。男が、自分を吹く風にすることができたら、あなたのお部屋の玉簾（たますだれ）の隙間（すきま）から入っていくだろうのに、というと、女は、風であろうと、誰の許しを得て、簾の隙間を求めて入ってくるというのか、そんなことは許さない、というのである。

その「みそかに語らふわざ」は、「みそかなる語らひ」といってもいえようのに、あえて「わざ」を用いているようにも思えてくるのである。和歌の贈答はしていても、その女の居所も定かでなく、恐らくは宮中に仕えていて、直接通うことなどはなかった。連体修飾語を受ける、その「わざ」には、いわゆる実事の有無を読みとらせようとする意図が見えてくるのである。

○心もとながりて、いと忍びて、ただ舎人（とねり）二人、召継（めしつぎ）として、やつれたまひて、難波（なには）の辺（へん）におはしまして、問ひたまふことは、「大伴（おほとも）の大納言殿（どの）の人や、船に乗りて、龍（たつ）殺して、そが頸（くび）の玉取れるとや聞く」と、問はするに、船人（ふなびと）、答へていはく、「あやしき言（こと）かな」と笑ひて、「さるわざ〔ヲ〕する船もなし」と答ふるに、…。（竹取・龍の頸（くび）の玉）

大伴の大納言は、家来に命じて、龍の首の玉を取りに行

かせた。しかし、年を越すまで連絡もない。そこで、舎人二人を連れて、難波あたりまで出かけていかれて、自分の家来が船に乗って、龍を殺して、その頸にある玉を取ったとは聞かないか、とお尋ねになった。その答えとして、船人が「さるわざ〔ヲ〕する船なし」と言っているのである。船人は、〈そんな（馬鹿げた）行為をする船はない〉と言っていると読みとってよいであろう。

この表現は、次章・第五章において取り上げる指示語としてその連体詞を冠したヲ格賓語ということでもあって、今の左大臣（＝藤原実頼）が少将だったころの話で、「いかなる心地しければか、さるわざ〔ヲ〕し〔し〕けむ、人にも知らせで車に乗りて内にまゐりにけり。」（大和・百七十一）など、展開性ある物語には見るところである。この場合は、その指示内容が、続く表現を先取りしている指示表現で、「人にも知らせで車に乗りて内にまゐりにけり」を受けている。人にも知らせないで車に乗って宮中に参上するなど、これも、〈そのような（変な）行為をしたのだろうか〉と感じとれよう。もっとも、その「わざ」と「こと」とは、それほどの差はないともいえるようで、それに続けて、そのようにして左衛門の陣で殿上の間への取り次ぎを頼んだところ、そこにいた人々は、「あやしきことかな。たれと聞こゆる人の、かかること〔ヲ〕は〔し〕たまふぞ」（大和・承前）と言ってもいたのである。

五　指示語としての連体詞「さる」「かかる」を冠した語句がヲ格賓語となっている他動詞「す」

既に前章・第四章において、「さる」を冠した形式名詞「わざ」がヲ格賓語となっている他動詞「す」の用例と、「かかる」を冠した形式名詞「こと」がヲ格賓語となっている他動詞「す」の用例とを見てきている。その「さる」「かかる」が、同じように、形式名詞「わざ」に冠せられている用例を、『大和物語』には、さらに見ることができる。

○かくにぎはは し き所にならひて、来たれば、この（もとの）女いとわろげにてゐて、かくほかにもありけど、さらにねたげにも見えずなどあれば、いとあはれと思ひけり。心地にはかぎりなく心憂く思ふを、しのぶるになむありける。とどまりなむと思ふ夜も、なほ「いね」といひければ、わがかく歩きするをねたまで、ことわざす

るにやあらむ。さるわざ〔ヲ〕せずは、恨むることもありなむなど、心のうちに思ひけり。（大和・百四十九）

大和の国、葛城の郡に住む男女の話である。波線部を手掛かりに〈わがかく歩きするをねたまで、ことわざする行為〔ヲ〕〉がその「さるわざ〔ヲ〕」の指示内容であると読みとることができる。その「ことわざ」は夫ではない男を通わせる行為で、その「わざ」は実質名詞だが、当然、非難すべき行為であるので、それを受ける指示表現「さるわざ」も、形式名詞「わざ」を用いることになったのであろう。

○この筑紫の妻、しのびて男したりける。それを、人のとかくいひければ、よみたりける。

夜はにいでて月だに見ずはあふことを知らずがほにもいはましものを

となむ。かかるわざをすれど、もとの妻、いと心よき人なれば、男にも、いはでのみありわたりけれども、…。（大和・百四十一）

第三章において、「男〔ヲ〕す」の用例としても引いた本文である。波線部を手掛かりに、〈筑紫の妻の、しのびて男しけるを、人のとかくいひけるに、「夜はにいでて…」といふ自嘲ぎみなる歌を詠みなどしける行為を〉が、その「かかるわざを」の指示内容と見えてくる。ここでは、直接、その手掛かりとなるところだけ引いてあるが、実際の文章としては、「よしいさといひける宰相のはらから、大和の掾といひてありけり。」から始まって、前に四文、その背景がある。究極的に誰の行為かを絞り込んで、その描写がどこから始まるかを見定めて、その指示内容を確認する目が必要である。

さて、その指示語としての連体詞「さる」「かかる」は、当然、概念の見える名詞にも冠せられて用いられる。その被修飾語は、今回、その用例資料とした四作品においては、いずれも連用形名詞であった。そこで、その連用形の基本形としての動詞が、その他動詞「す」の動作であると見ることで、読解の大きな手掛かりが得られることにもなろう。

その話は、若い人が人目をひく召し使いの女を愛しいと思ったところから始まる。しかし、その男の親は、その女を追い出そうとする。男が抵抗できないままでいるうちに、女は誰かに連れていかれてしまった。男は、その思い

を歌に詠むや、失神してしまった。

○…親、この女を追ひうつ。男、血の涙を流せども、とどむるよしなし。率ていでていぬ。男泣く泣くよめる。

いでていなばたれか別れのかたからむありしにまさる今日は悲しも

とよみて絶え入りにけり。親あわてにけり。なほ思ひてこそいひしか、いとかくしもあらじと思ふに、真実に絶え入りにければ、まどひて願立てけり。今日のいりあひばかりに絶え入りて、またの日の戌の時ばかりになむ、からうじていきいでたりける。むかしの若人は、さるすける物思ひをなむ[し]ける。（伊勢・四十）

その若い男の「すける物思ひ」は、どこから始まるのであろうか。どこまでなのであろうか。「親、あわてにけり。」以降の描写は、その男が「…絶え入りにけり。」の後なので、男の「すける物思ひ」など、述べられていようはずもない。波線部を手掛かりとして、〈召し使ひの女を愛しく思ふ若き男の親、その女を追ひうてむとするに、人、その女を率て家を出でければ、その男の、「いでていなば…」といふ歌詠みて絶え入るばかりの一途なる物思ひを〉ぐらいのところが、「さるすける物思ひを」の指示内容ということになろう。その他動詞「し（→す）」が〈思ふ〉動作を担っていること、容易に理解できよう。

前章・第四章の末尾においても見てきているように、指示内容が指示語の後に述べられている場合が本文の該当用例にも見られる。大納言には、美しい娘がいて、帝に差し上げようと大事に育てていたが、そこに仕えていた内舎人が、その娘を見て、恋しく思うようになってしまった。そう思うあまり、申し上げたいことがあると、何度も言い続けていた。そして、たまたま、娘が出て来たところを瞬時に抱きすくめて、馬に乗せて、陸奥の国へ、逃げていったのであった。

○（内舎人、大納言の女に、）「せちに聞えさすべきことなむある」といひわたりければ、（大納言の女）「あやし。なにごとぞ」といひていでたちけるを、さる心まうけ[ヲ][し]て、ゆくりもなくかき抱きて、馬に乗せて陸奥の国へ、夜ともいはず昼ともいはず、逃げていにけり。安積の郡、安積山といふ所に庵をつくりて、この女をすゑて、里に出て物などはもとめて来つつ食はせて、年月を経て

ありへけり。（大和・百五十五）

「さる心まうけ〔ヲ〕」は、直前を含めて、しかし、主として指示表現以降の描写から、〈大納言の女のいできたらば、かき抱きて、馬に乗せ、陸奥の国へ逃げてゆき、安積山の麓に庵をつくりて、その女をすゑて、年月をありへむといふ心まうけ〔ヲ〕〉というように読みとることができよう。波線部がその指示内容を捉える手掛かりとなるところである。その他動詞「し（→す）」は〈（心のなかで）準備する〉という心内の動作を担っていることになる。

六　指示語としての副詞「かく」「さ」が賓語となっている他動詞「す」

指示語としての副詞「かく」「さ」が、他動詞「す」の賓語となっている用例については、現代人の認識が、その賓語はヲ格でなければならない意識となっているところから、その指示内容は、ヲ格賓語となるように言い換えて受けとめられることになる。「かく」は、「かかることを」「かかるわざを」に、「さ」は、「さることを」「さるわざを」に、それぞれ、言い換えて指示内容を受けとめている、ということである。ただ、その「こと」か「わざ」かの別は、その指示内容の評価に関わっての相違であるので、本章の、以下の論述においては、その別にはこだわらないこととする。

その話は、帝がお心をお掛けになっている召し使いの女で、禁色を許された人がいたことから始まる。その女は、殿上の間に仕える在原氏の若い男と知り合う仲となっていた。男は、女房たちの部屋に立ち入ることを許されていて、そこにやって来て動こうとしなかった。

○殿上にさぶらひける在原なりける男の、まだいと若かりけるを、この女あひしりたりけり。男、女がたゆるされたりければ、女のある所に来てむかひをりければ、女、「いとかたはなり。身も亡びなむ、かくなせそ」といひければ、…。（伊勢・六十五）

その女は、知り合いとなった在原氏の若い男の、そのように執拗なほどに纏わりつく素振りを嫌って、「かくなせそ」と言ったのである。その「かく」は、「かかるわざを」に言い換えられ、〈女のある所に入り来て、向かひあへるわざを〉ぐらいに読みとったら、その禁止する指示内容が明

らかになったことになろう。その他動詞「せ（→す）」は、〈入り来て、向かひあふ〉動作を担っていることになろう。

さて、その歌物語には、その続きがある。「かくなせそ」と言われた男は、「思ふにはしのぶることぞまけにけるあふにしかへばさもあらばあれ」と詠んで、女が自室に下がっていても、このお部屋に上がっているというありさまだったので、女は里へ帰ってしまう。すると、男は、その女の里へしばしば尋ねていったので、人々はその話を聞いて笑ったのだった。朝早く、主殿司が見ると、こっそり宮中へ戻った男は、沓は奥のほうに投げ入れて、昨夜宿直したように見せて、殿上の間に上がってしまうというぐあいだった。そして、その後に、その一連の動作を「かく」で受けとめて、総括するのである。現代の活字本テキストでは、そこで改行されて、次の段落の冒頭ということになるのである。

○かく　かたはにしつつありわたるに、身もいたづらになりぬべければ、つひに亡びぬべし、とて、この男、「いかにせむ、わがかかる心やめたまへ」と、仏神にも申しけれど、…。（伊勢・承前）

この「かく」も、「かかるわざを」に言い換えて、〈人の目を無視して、女の曹司にまで押しかけ、さらに、女の里に帰るや、その里にまで行き通ひて、世の人々の笑ひ種になるも、なほ通ひつづけ、つとめて、女の里より宮中に出仕して、沓を奥の方に投げ入れなどする行為を〉ぐらいのところをいっていることになろう。この男のストーカー行為をひっくるめて、指示語としての副詞「かく」で述べている、ということになるのである。

指示語としての副詞「さ」もまた、他動詞「す」の賓語となって、そこに展開された一連の行為のあらましを指していう際に用いられる。例の、「生田川」と題される歌物語は、摂津の国の女に二人の男が思いを寄せた話である。二人の男の愛情に差が認められないところから、女の親が水鳥を射させて勝負をつけさせようとするが、一人の男は水鳥の頭を射、いま一人の男性は水鳥の尾を射る結果となって、ついに女は川に身を投げてしまった。男二人も、身を投げてしまった。その女の塚の傍らに、さらに塚を二つつくって埋葬することになる。

○さてこの男は、くれ竹のよ長きを切りて、狩衣、袴、

烏帽子、帯とを入れて、弓、胡籙、太刀などを入れてぞうづみける。いまひとりはおろかなる親にやありけむ、さも$\boxed{せ}$ずぞありける。（大和・百四十七）

〈くれ竹の節長きを切りて垣とし、狩衣・袴・烏帽子・帯・また、弓・胡籙・太刀などを（副葬品として）入るることを〉が、その「さ」を「さることを」と解して、それを具体的に捉えた指示内容ということになるであろう。その「せ（→す）」は、〈（副葬品を副えて）埋葬する〉行為を担っていることになるが、この本文としては、打消の助動詞「ず」が付いているので、副葬品などを副える形式ではなく埋葬した、と読解されよう。

以上、副詞賓語「かく」を、ヲ格賓語「かかることを」「かかるわざを」に、副詞賓語「さ」を、ヲ格賓語「さることを」「さるわざを」に、それぞれ読み換えて読解してきた。それは、読解の便宜として試みた要領でしかないが、そこに用いられている他動詞「す」の概念把捉には有効な読解法と自負している。指示語としての副詞「かく」「さ」がこのように他動詞「す」の賓語となるということは、それほどに他動詞「す」の担える概念に広がりが見られた、ということであろうか。

七　既出表現を手掛かりにヲ格賓語が想定されることを前提にしている他動詞「す」

第五章において、人目をひく召し使いの女に対する思いを歌に詠むや、失神してしまった男の話を引いた。その「さるすける物思ひ」に続く表現である。

○むかしの若人は、さるすける物思ひをなむしける。今のおきな、まさに$\boxed{し}$なむや。（伊勢・四十）

右の他動詞「し（→す）」には、その賓語が見当たらない。当節の老人は、どうしてするだろうか、いやしないだろう、と読みとれても、何をするのか、そこが述べられていない一文である。もちろん、その前文を見たとき、そこには、「さるすける物思ひをなむ$\boxed{し}$ける。」とあって、そのヲ格賓語「さるすける物思ひを（なむ）」を、そのまま借りて詠む「今のおきな、まさにしなむや。」文だったのである。このような表現の関係について、松下大三郎は、詞の実質化と呼んで、「昨年は旅行したが今年はしない」などの用例を引いている。[12]

○…この人、歌よまむと思ふ心ありてなりけり。とかくいひて、「波の立つなること」とうるへいひて、よめる歌、

行く先に立つ白浪の声よりもおくれて泣かむわれやまさらむ

とぞよめる。…この歌を、これかれあはれがれども、一人も返しせず。し つべき人もまじれれど、これをのみいたがり、物をのみ食ひて、夜更けぬ。（土佐・一月七日）

破子を持たせてやって来た人は、一首詠んで褒めてもらおうと思ってやって来たようだが、誰も返歌しなかった。その「…一人も返しせず。」に続く、次文の「しつべき人もまじれれど」の「し（→す）」は、前文末尾の「返し〔ヲ〕せず。」の「返し〔ヲ〕」というヲ格賓語を、そのまま借用していることになろう。

○仁和中納言の御息所の家に、歌合せむとて し ける時によみける（古今・春下・一〇八・詞書）

右の「歌合せむとて」は、現行一般には「歌合はせせむとて」と表記されるところである。それは、「歌合はせ〔ヲ〕せむとて」ということで、その「て」の下には、読点（、）がほしいところでもある。そこで、続く「しける時に、」の「し」には、ヲ格賓語が表現されていないことになる。もちろん、そのヲ格賓語「歌合はせ〔ヲ〕」は、既出の「歌合せむとて＝歌合はせせむとて、」から借用していたことになるのである。

○…かくてすまずなりてのち、中将のもとより、衣をなむ、しにおこせたりける。それに、「あらはひなどする人なくて、いとわびしくなむある。なほかならず し てたまへ」となむありければ、内侍、「御心もてあることにこそはあなれ。…」となむいひやりける（大和・百六十）

染殿の内侍に在中将が通っていたが、内侍が中将に、もう私に飽きたのではないかという趣旨の歌を送ったところ、中将から、秋が来ても私の心はあなたを離れないのにという返歌があって、それ以来、中将は通っていかなくなってしまった。その後、中将から、着物を仕立ててもらいによこした。さらに、「洗濯などする人がいなくて、困っています。やはり必ずしてください」と言ってきたので、内侍は、「お困りなのは、あなたのお心がけによるもののようです。…」と言ってやった。そういう話のところである。

ここには、他動詞「す」が三回見られる。「衣をなむ、し

におこせたりける。」の「し（→す）」は、第三章において観察してきた非連用形名詞が賓語となっている他動詞「す」で、〈仕立てる〉意を担っている用例である。既に、その第三章において確認してきているところである。続く「あらはひなどする人なくて、」の「する（→す）」は、「あらはひなど〔ヲ〕する」と解する文脈にあって、連用形名詞が副助詞を添えた「あらはひなど〔ヲ〕」がそのヲ格賓語となる他動詞「す」である。これも第二章で見てきているところである。そして、三番めの「し（→す）」が、本章で注目している他動詞「す」である。そこには、ヲ格賓語が存在しないが、実は、会話文のなかの前文にあった「あらはひなど」が借用されていて、その「あらはひなど」が、この三番めの「し（→す）」にとっても、「あらはひなど〔ヲ〕」というヲ格賓語となっていたのである。

○いづもが、はらからひとりは殿上して、われはえせざりける時に、よみたりける。（大和・三十七）

出雲の守が、兄姉のうち、一人は昇殿を許されていて、自分はそれができなかったときに詠んだ歌、という詞書そのものといってよい物語である。そのような情況で、「かく咲ける花もこそあれ…」という歌を詠んだ、というのである。そこで、その「殿上して、」は、「殿上〔ヲ〕して、」ということで、その「殿上〔ヲ〕」が他動詞「し（→す）」のヲ格賓語である。続く「われはえせざりける…」の「せ（→す）」には、賓語が存在しないが、既出の「殿上〔ヲ〕」を借用しているのである。「殿上」は漢語だが、小稿・第三章の非連用形名詞が賓語となっている用例に準じて解していくことができよう。

八　深層に配されている事柄を手掛かりにヲ格賓語が想定されることを前提にしている他動詞「す」

かぐや姫の美貌は、帝のお耳にも入って、内侍中臣のふさ子が、竹取の翁の家に勅使として見えた。帝がお召しであることを伝えたが、姫は応じない。すると、今度は翁が呼び出されることになる。そして、帰宅後、翁は、姫に、相談する口調で語る。

○翁、…かぐや姫に語らふやう、「かくなむ帝の仰せたまへる。なほやは仕うまつりたまはぬ」といへば、かぐや姫答へていはく、「もはら、さやうの宮仕へつかまつらじと

思ふを、しひて仕うまつらせたまはば、消え失せなむず。御官かうぶり仕うまつりて、死ぬばかりなり」。翁いらふるやう、「なし たまひそ。…」といふ。（竹取・かぐや姫、帝の召しにも応ぜず）

その翁の「なし たまひそ。」は、現代語訳するだけだったら、〈なさってはいけない。〉で十分である。しかし、それでは、どのようなことをしてはいけないと言っているのかが見えてこない。その「し（→す）」が、〈（何かを）行う〉意の他動詞であろうと感じとれたとしても、ヲ格賓語は見当たらないのである。前章・第七章で見てきたように、既出表現のなかから、ヲ格賓語に相当する語句を見つけることもできないようである。かぐや姫の発言のうちの、どのような事柄に絞って、それらをヲ格賓語の形式に整えて想定したらよいか、そういう読解が要求されている表現だったのである。

「消え失することなど〔ヲ〕」か、漠然とだが、「死ぬることなど〔ヲ〕」か、と感じとれよう。どちらかといえば、姫の直前の発言「死ぬばかりなり」を受けていると見たくもなろう。翁は、その「なし たまひそ」に続けて、「かうぶりも、わが子を見たてまつらでは、なににかはせむ。さはありとも、などか宮仕へしたまはざらむ。死にたまふべきやうやあるべき」と言っているのである。そこで、「死ぬることなど〔ヲ〕」を想定して読まれることを期待した表現だったということになろうう。二か所の波線部が手掛かりになっている、ということになろう。

河原の院は、源の融の邸で、陸奥の塩竈をまねてつくらせて、塩を焼かせたりしたことで知られている。融亡き後、宇多院に奉ったのだが、宇多院は、そのお邸をいっそう風流におつくりになって、そこに京極の御息所のお部屋だけをおつくりになって、ご自身もお移りになってしまった。そこで、それまで住んでいらっしゃった亭子の院には、残された御息所たちだけがさびしく住んでいらっしゃった。春の、藤の花の盛りのころ、殿上人たちが見えて、「院はこの花の盛りをご覧にならないで」などと言って見てまわっていると、藤の枝に文が結びつけてあった。そこには、「世の中の…」という歌が書いてあった。人々は、しみじみとした思いに浸ったが、どの御息所がなさったか、わからなかった。そこで、男たちは、「藤の花は…」という歌を詠

んだのだった。以下に、その本文を引こう。

○…春のことなりけり。（亭子院に）とまりたまへる御曹司ども、いと思ひのほかにさうざうしきことをおもほしけり。殿上人など通ひまゐりて、藤の花いとおもしろきを、これかれ、「さかりをだに御覽ぜで」などいひて見歩くに、文をなむ結びつけたりける。あけてみれば、

　世の中のあさき瀬にのみなりゆけば昨日のふぢの花とこそ見れ

とありければ、人々見て、かぎりもなくめであはれがりけれど、たが御曹司の$\boxed{し}$たまへるとも知らざりける。男どものいひける。

　藤の花色のあさくも見ゆるかなうつろひにけるなごりなるべし（大和・六十一）

右の「たが御曹司の$\boxed{し}$たまへるとも知らざりける。」の「し（→す）」も、他動詞と感じとれはしようが、どのようなことを「$\boxed{し}$たまへる」ということになるのであろうか。手掛かりとなる波線部から、「藤の枝に文を結びつけたりけること〔ヲ〕」がまず捉えられる。本文には「藤の花」しか出てこないが、「結びつけたりける」には、「藤の枝」でなければならないことになろう。以上は、表面的な行為と事物とで、最も重要なところは、その「文」にどのようなことが書いてあったかである。「「世の中の…」といふ歌詠みて、藤の枝に、その文を結びつけたりけること〔ヲ〕」が、その他動詞「し（→す）」の最もふさわしいヲ格賓語ということになるであろう。この本文の、その「し」は、そのようなヲ格賓語を想定して読んでくれることを期待している表現だったのである。

　第六章にも引いた、あの「生田川」にも、本章に該当する他動詞「す」が見られたのである。一人の男が水鳥の頭を射、いま一人の男が水鳥の尾を射たので、女は、どちらが勝ちということもできないまま身を投げてしまう。二人の男も、身を投げてしまった。

○…そのかみ、親いみじくさわぎて、とりあげてなき、のしりてはぶりす。男どもの親も来にけり。この女の塚のかたはらに、また塚どもつくりてほりうづむ時に、津の國の男の親いふやう、「おなじ国の男をこそ、おなじ所には$\boxed{せ}$め。こと国の人の、いかでかこの国の土をばをかすべき」といひてさまたぐる時に、和泉の方の親、和泉

の国の土を舟にはこびて、ここにもて来てなむ、つひにうづみてける。（大和・百四十七）

その他動詞「せ（→す）」のヲ格賓語は、「塚をつくりてほりうづむこと〔ヲ〕」である。「塚」につく接尾語「ども」は、ここには不要である。この「せ（→す）」について、「うづま（→うづむ）」の代動詞であるなどという受けとめ方があってはならない、と思っている。次章・第九章において、いま一度触れることになるが、古典語動詞「す」にも現代語動詞「する」にも、そのような代動詞という理解が適切と思える用例は存在しない、と思っている。この「せ（→す）」は、表現としては述べられていないが、本文の深層に配されている事柄から、ヲ格賓語「塚をつくりてほりうづむこと〔ヲ〕」を想定して、それを受ける他動詞「す」として読んでいくところと解したい、と思っている。

九　他動詞「す」が修飾語に含まれている場合のヲ格賓語
―その被修飾語から読み解く読解法―

本章は、修飾語のなかに用いられた他動詞「す」のヲ格賓語の捉え方を説こうとする章であって、第六章もそうであったが、その第六章以上に読解法の章である。本章の小見出しに、他動詞「す」が修飾語に含まれている場合といっているが、そこには、他動詞「す」が連体修飾語に含まれている場合と他動詞「す」が連用修飾語に含まれている場合とがあることを、あらかじめいっておきたい。以下、その順に述べていくこととする。

連体修飾語のなかに他動詞「す」が含まれている用例としては、その一文や一首が、古典文学作品として広く知られている二用例を揚げることができる。そのヲ格賓語を捉える解法は、極めて容易で、鮮やかに解明していけるはずであるが、時に、あるいは、しばしば、誤解を生んでもいるようである。早速、そのうちの一用例を引いて、その他動詞「す」のヲ格賓語を捉えていくこととする。

○男もすなる日記といふものを、女もしてみむとてするなり。（土佐・十二月二十一日）

右の「男もすなる日記」の「男もすなる」は、それに続く被修飾語「日記」を修飾する連体修飾語である。その連体修飾語のなかに用いられている「す」は、他動詞と感じ

とれるので、ヲ格賓語が存在するはずである。そのヲ格賓語は、現在、被修飾語となっている「日記」にヲ格を添えて、「日記〔ヲ〕」というように想定したときに見えてくることになる。そのようにして、『土佐日記』冒頭文の他動詞「す」のヲ格賓語は、「日記〔ヲ〕」であると確認される。

因みに、その『土佐日記』冒頭文に見る「してみむとて」の「し（→す）」や「するなり」の「する（→す）」も、他動詞「す」と感じとれる。そこで、それらのヲ格賓語は、どのように読みとることができるであろうか。それは、ともに、「日記といふものを」である。その「し（→す）」や「する（→す）」の主語が「女も」だからである。日記というものの存在を聞き知った女性である筆者が、その「日記といふものを」、いま書こうとしているのである。そして、何よりも、本文にそう書いてあるのである。

以上に見てきた他動詞「す」「し（→す）」「する（→す）」を「書く」という動詞の代動詞だなどというような理解をすることは、適切ではない。前章・第九章の『大和物語』百四十七段のなかに見られた他動詞「す」についても、その具体的な動作をストーリーから映像化させて、「うづむ」の代動詞だなどということは適切ではない、と述べてきた。殊に、この『土佐日記』冒頭文は、高等学校検定教科書教材に極めてしばしば採用されていて、学習参考書や自習書のなかに、そのような記事を見たことが一再ならずあった。この機会に、あえて脱線させていただいた。

いま一用例は、『伊勢物語』にも『古今和歌集』にも載る、次の一首である。

○恋せじとみたらし河にせしみそぎ神はうけずもなりにけるかな（伊勢・六十五・和歌／古今・恋一・五〇一―第五句「なりにけらしも」）

右の「恋せじとみたらし河にせしみそぎ」の「せし」の「せ（→す）」は、他動詞と感じとれる。その「せ（→す）」のヲ格賓語は、いま、連体修飾語となっている「…せし」の被修飾語「みそぎ」をヲ格に位置づけることによって想定される。その他動詞「せ（→す）」のヲ格賓語は、いま想定された、その「みそぎ〔ヲ〕」である。

連用修飾語のなかに他動詞「す」が含まれている場合について、以下に取り上げ、観察に併せて読解を試みることとする。現在のところ、以下に紹介する二用例が該当する

が、ともに、比況の助動詞によって構成された連用修飾語のなかに他動詞「す」が用いられている用例である。加えて、ともに、被修飾語のなかにヲ格賓語が見出だせたり、ヲ格賓語の手掛かりが得られたりするものである。

○あづさ弓ま弓つき弓年を経てわがせしがごとうるはしみ〔ヲ〕せよ（伊勢・二十四・和歌）

その上の句は、序詞「あづさ弓ま弓つき弓」を受ける「年を経て」だけが、その意味するところである。そして、その「年を経て」は、「わがせしがごと」にかかっているが、いまは切り離すこととして、「わがせしがごとうるはしみ〔ヲ〕せよ」だけ観察することにする。その「わがせしがごと」は「うるはしみ〔ヲ〕せよ」の連用修飾語であり、「うるはしみ〔ヲ〕せよ」はその被修飾語であることが、まず確認される。その「ごと」が連用形「ごとく」に相当することは、広く認識されていよう。

さて、その「…せしがごと」の「せ（→す）」が、他動詞「す」と感じとれても、ヲ格賓語が先行していない。そこで、その被修飾語を見ると、「うるはしみ〔ヲ〕せよ」とあって、その「せよ（→す）」も他動詞「す」であって、そのヲ格賓語「うるはしみ〔ヲ〕」が、そのまま、先行するヲ格賓語の存在しない他動詞「せ（→す）」のヲ格賓語と見えてくるのである。その「うるはしみ」は、形容詞「うるはし」に接尾語「み」が付いたものであるが、連用形名詞に準じて受けとめられていたのであろう。『万葉集』にも、「さ百合花ゆりも逢はむと思へこそ今のまさかも愛しみ〔ヲ〕すれ」（宇流波之美須礼）（万葉・18・四〇八八）という用例も見られた。

○男、かの女のせしやうに、忍びて立てりて見ければ、女、嘆きて寝とて…（伊勢・六十三）

男を慕う気持ちの強い女が、願い叶って在五中将と共寝することができた。だが、その後、男が現れなかったので、男の家に行って覗き見をすると、ちょうど女の家へ出かけようとしているところだった。そこで、女は、喜んで家へ帰り、男を待っていた。男は、その女がしたように、こっそり立って見ると、女は男恋しさに嘆いて寝ようとして、というのが、右の本文である。

その本文の「かの女のせしやうに、」の「せ（→す）」は、他動詞であろうと感じとれる。ただ、その「せ（→す）」に

先行するヲ格賓語は存在しない。その「かの女のせしやうに、」は、「忍びて立てりて見れば、」の連用修飾語となっている。その被修飾語「忍びて立てりて見れば、」を手掛かりにして、「かの女のせしやうに、」の「せ（→す）」のヲ格賓語を「忍びて立てりて見ること〔ヲ〕」と想定することができる。そのようにして、「かの女のせしやうに、」は、読解できたのであるが、この本文には、その「せ（→す）」の理解を誤らせる事情もあった。

○…さてのち、男見えざりければ、女、男の家にいきてかいまみけるを、男、ほのかに見て、

百年（ももとせ）を一年（ひととせ）たらぬつくも髪（がみ）われを恋ふらしおもかげに見ゆ

とて、いで立つけしきを見て、うばらからたちにかかりて、家にきてうちふせり。（伊勢・前用例の直前の本文）

右の波線部「かいまみけるを、」を「かの女のせしやうに、」の「せ（→す）」が受けているとして、その「せ（→す）」を「かいまみる」の代動詞と見てしまうことなどは、あってはならない誤解である。その「せ（→す）」をヲ格賓語を必須とする他動詞と見ても、そのヲ格賓語を「かいまみること〔ヲ〕」などと見てしまうことも、やはり誤解である。連用修飾語のなかに含まれていてヲ格賓語が先行していない他動詞「す」のヲ格賓語は、後続する被修飾語に手掛かりが述べられている、というのが、当代の日本語構文であったろうと思えるからである。

十　他動詞「す」には必須と見たいヲ格賓語

他動詞「す」は、すべからくヲ格賓語を必要とする性質を有していた、と見ることで、他動詞「す」の具体的な読解に、一定の安堵感が与えられるものと思おうと思っている。ただ、確かなヲ格賓語として他動詞「す」に先行する線状性をもってヲ格賓語が登場するのは、小稿の第二章に引いた該当用例に限られるであろう。第三章にも、ヲ格賓語として適正な格関係の認められる用例は、もちろん存在するが、若干そうはいいきれない飛躍した関係の賓語も見られて、それら用例から第九章までの各用例については、いずれも、第二章の用例のようには、そのヲ格賓語が配されている表現ではない。そうではあっても、それらのいずれもが、ヲ格賓語として読まれることを期待して表現され

ていると筆者にはほぼ推断されたのである。そこで、それら、第二章に見たような型通りのヲ格賓語を他動詞「す」に先行させていない各用例について、適正なヲ格賓語に整えて読解していく方途を探っていて、成ってしまったものが小稿である。

小稿が、時代を、さらには作品をまで絞って調査した事情については、既に第一章に触れてきているが、それほどに、この動詞「す」は、時代と作品とで異なる機能を見せるといってよいようである。近年に限っても、数編の動詞「す」についての調査結果などを発表してきているが、そして、それらは、上代・中古に限られるのであるが、今回は今回で、それまでに観察できなかった、この動詞「す」の用法を確認することができたのであった。

その今回、その動詞「す」を他動詞「す」に限って、その賓語も、ヲ格賓語として、関係する賓語を、そのように転換させて読解に結びつけようとしたのであるが、しかし、そのすべてについて検討できているわけではない。たまたま、引用例文との関係から、「四十の賀〔ヲ〕す」や「殿上〔ヲ〕す」にも触れることとなったが、実は、漢語を賓語とする用例については、その調査を見送っている。また、第三章の非連用形名詞が賓語となっている用例については、表面的にはヲ格と見えても、そこに格関係の飛躍があるかに見える用例もあって、その確認の不十分なものを残してきたことが反省される。そんな段階にあるのだが、とにかく他動詞「す」は、その賓語をヲ格賓語に位置づけて読まれることを期待して表現されていると見えてきて、他動詞「す」は、ヲ格賓語を必須として用いられる、と見ようと思っている。もちろん、形容詞連用形に直接する他動詞「す」としての「かなしうす」（伊勢・八十四）などについては、別途、整理しなければならないと思っている。そのような一群を除いて、他動詞「す」は、ヲ格賓語を必須として用いられる、と見ることで、適切な読解がなされるものと思っている。

注

（1）山田孝雄『日本文法論』（宝文館・明治四十一年）第一部　語論　第三章　語の性質　第二　用言　四　形式　用言の三　一二ページから三二五ページまでに述べられているところ

を、筆者として受けとめて、ここに紹介した。「賓語」についても、そこに述べられているところを、筆者として受けとめて、ここに紹介した。

（2）いま、その現行古語辞典の例として『古語大辞典』（中田祝夫編監修／小学館・昭和五十八年）を参看した。ただ、そのブランチ②は、志向を意味する「…むとす」の「す」との相違が微妙で、一般には立項されない。ブランチ③は、現在、多くが接続助詞「して」として取り扱うようになっている。

（3）拙稿「連体修飾語を必須とする「さま」「心地」「けはひ」などと、その述語となる自動詞「す」とについて」（「國學院雑誌」第一一七巻九号・平成二十八年）。

（4）拙稿「『源氏物語』の動詞「す」の読解」―ヲ格＋ニ格＋「す」構文への注目―（「國學院雑誌」第一六巻六号・平成二十七年）。

（5）拙稿「『万葉集』歌の動詞「す」について―十五の観察視点―」（「國學院大學栃木短期大学紀要」第五十号・平成二十八年）。

（6）拙稿「『古今和歌集』『後撰和歌集』『拾遺和歌集』『後拾遺和歌集』」の動詞「す」について」（「國學院大學栃木短期大学紀要」第五十一号・平成二十九年）。

（7）拙稿「『金葉和歌集』『詞花和歌集』『千載和歌集』『新古今和歌集』の動詞「す」について」（「國學院大學栃木短期大学紀要」第五十二号・平成三十年）。

（8）注（5）の拙稿のなかで検出した連用形名詞がヲ格賓語となる用例は、異なり語数で小稿にいう【第Ⅰ群】が四十七語、【第Ⅱ群】が七語、【第Ⅲ群】が十一語見られた。したがって、『万葉集』歌のなかには、ヲ格賓語となった連用形名詞が六十五語あったことになる。

（9）拙稿「例示の副助詞「など」によって起用された補助動詞「す」について」（「國學院雑誌」第一一六巻十二号・平成二十七年）を参照されたい。

（10）「髪あげ」については、本文に、その解説を試みてある。「山ぶみ」も、単に山を踏むことではなく、〈金峰山・高野山・竹生島（ちくぶしま）など霊山の山行〉をいっているようである。「返し」も〈返歌〉に限って理解し、「行ひ」も〈勤行〉を指していう仏教関係用語として受けとめなければならない連用形名詞といえようか。

（11）拙稿「連体修飾語を冠する和歌の類句「恋もするかな」」（「國學院雑誌」第一一八巻第一二号・平成二十九年十二月）において、和歌の類句「恋もするかな」に注目したとき、そこ

には連体修飾語が必須であることに気づかされ、さらに、それは、『万葉集』歌に見る「恋もするかも」が連体修飾語を冠していた形式を引き継いだものであることを報告した。そして、それが、他動詞「す」のヲ格賓語に連体修飾語を冠した連用形名詞が現れる契機となったものと推論した。ここには、その典型的な二首を引いておく。

○ほととぎすな鳴くやさ月のあやめ草あやめも知らぬ恋〔ヲ〕もする哉（古今・恋一・四六九）

○あひおもはでうつろふ色を見る物を花に知られぬながめ〔ヲ〕する哉（後撰・春下・五九）

なお、その連体修飾語については、警戒を要する場合が、時に見られる。「藤原のときざね、船路なれど馬のはなむけ〔ヲ〕す。」（土佐・十二月二十二日）に見られた、その「馬のはなむけ」は、「はなむけ」に「馬の」という連体修飾語が冠せられたものではない。「馬の鼻」に下二段活用動詞「向く」の連用形が付いて構成された複合名詞である。したがって、語構成からは、【第Ⅰ群】に属する用例ということになるであろう。

(12) 松下大三郎『改撰標準日本文法』（紀元社・昭和二年）第六編　詞の相関論　第二章　成分の統合　第三節　補語と形式語　詞の実質化（篠九七ページ）に見る用例である。